The University of Osaka
Institutional Knowledge Archive

Title	＜図書紹介＞『認知意味論 ： 言語から見た人間の心』
Author(s)	大森, 文子
Citation	大阪大学言語文化学. 1993, 2, p. 140-141
Version Type	VoR
URL	https://hdl.handle.net/11094/78187
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

The University of Osaka

ジョージ・レイコフ著（池上嘉彦、河上誓作、辻幸夫、西村義樹、坪井栄治郎、梅原大輔、大森文子、岡田禎之　訳）『認知意味論――言語から見た人間の心――』紀伊國屋書店、1993年、777頁、8800円。ISBN 4-314-00575-0 (George Lakoff, *Women, Fire, and Dangerous Things: What Categories Reveal about the Mind.* 1987 by The University of Chicago.)

数年来、認知科学という新しい分野が大きな発展を遂げつつある。認知科学は、心理学、言語学、人類学、哲学、コンピュータ科学などさまざまな学問分野から、心というものについての知見を統合するという学際的な学問である。ここで言う「認知」とは、人間がいろいろな事物から「意味」を読み取るという、精神の営みのことであるが、この人間の認知の営みの中でも中心的な位置を占めるのが、言語を介しての意味の読み取りということになるであろう。従って、言語の問題は、認知科学の研究の中でもきわめて重要な研究対象であると考えられる。

本書『認知意味論』は、これまでの哲学や認知心理学の研究成果も踏まえつつ、言語、とりわけその意味が人間とどう関わっているのかを詳細に論じ、人間の精神の本質そのものの解明を試みた野心的な大著である。原著の副題(What Categories Reveal about the Mind)にも示されている通り、本書では、カテゴリーに関する研究に力点が置かれている。従来の意味論が暗黙の前提としてきた「客観主義」の見解では、カテゴリーは、それに属するメンバーが共通に持つ特性によって専ら特徴づけられるものであり、カテゴリーを形成する人間の身体性や人間の心の持つ想像的な仕組（メタファー、メトニミー、心的イメージ）はカテゴリーの本質には関与しない、とされる。しかし本書は、こういった客観主義の見解に真っ向から対立する。レイコフは、身体性に基づく経験や想像的な仕組はカテゴリーの形成において中心的な役割を果たす、という考え方に立ち、近年の認知科学の諸研究により提示された豊富な証拠に基づいて、この新しい経験基盤主義的見解を論証する。さらに、人間の思考、理性の営みそのものについても、レイコフは、客観主義的な見解を退け、経験基盤主義の見地からその本質についての説明を行っている。

人間の心というものをどのように理解するかということは、言語学のみならず、人文科学全般にとっても重要なトピックである。伝統的な、しかも今日広く当然のこととして受け入れられている客観主義的見解に異議を唱え、人間の心についての新しい、しかも説得力のある理論を構築しようと試みたレイコフの本研究は、言語と文化を学ぶ者にとって非常に興味深いものであると考える。(大森文子[3])

[3] 言語文化部英語教育講座